

藤田 明

- ① ゲームの規則 ジャン・ルノワール 1982 仏
- ② 悪魔が夜来る マルセル・カルネ 1942 仏
- ③ 木靴の樹 エルマンノ・オルミ 1978 伊

①の初見は1962年の日仏交換映画祭、フィルムセンターの前身新装の近美講堂。『南部の人』の肉體性を知った後、何度も見た『大いなる幻影』を挙げてもいいが、ラモーに通じるバロック、ロココのフランス的伝統との結合ゆえに。『トニ』の新鮮さも浮かんでくるもの、である。②は戦後すぐの高校2年の時。戦中の芸術的抵抗の例、北川冬彦が熱く唱えた散文映画の例としても忘れ難い。③はF・ロージを、とも考えたが、後奏のバッハを反芻すべくミリオン座から名駅までわざわざ歩いて、津への最終となった。

1930年代中国映画からとも思うが、再見したい例なら①マヅルカ、②熱風、③偽りの花園。そうなると来日のサドウールと歓談できた際の例、J・グレミヨンも、である。

水野圭次郎

- ① 恋する惑星 ウォン・カーヴァイ 1994 香港
- ② バグダッドカフェ パーシー・アドロン 1987 独
- ③ サイドウェイ アレクサンダー・ペイン 2004 米

①台本無しで撮影をするウォン監督のスタイリッシュで、疾走感のある作品。中国返還前の混沌とした香港を見事に描き出しています。タランティーノが絶賛したのも頷けます。②アメリカのモハベ砂漠の外れにあるカフェで出会った二人の女の友情物語。ジェベッタ・スタイルの歌う「コーリングユー」はアカデミー賞最優秀主題歌賞を受賞し、80組以上のアーティストによってカバーされました。③独身最後のひとときをワインとゴルフで楽しむため、カリフォルニアのワイナリーを巡る旅に出る二人の男のロードムービー。人生の大きな転機を考えさせられる作品です。

村上 暁 あきむら

① レザボア・ドッグスクエンティン・タランティノー 1993 米
② プライベートライアン

ステイブ・スピルバーグ 1998 米

③ セント・オブ・ウーマン 夢の香り

マーティン・ブレスト 1993 米

たくさんある大好きな映画の中で、あえて3本を選ぶとすれば、若いころに見て衝撃を受けた映画を選びます。

① 現在、過去を行ったり来たりしながら、ストーリーが語られていく。この方法がすごく面白かった。リトルグリーンバッグが流れる中を歩く男たち。車の中、血まみれで叫ぶオレンジ。踊りながら警官を拷問するブロンド。ボロボロになった警官とオレンジの会話。壮絶なラストシーン。何度見ても最高です。② 戦争映画といえばこの映画。冒頭のノルマンディ上陸作戦。自分が戦場にいるような緊張感。無機質な怖さ。絶対に兵隊にはなりたくないと感じた。

③ セント・オブ・ウーマン 夢の香りは、印象的な名シーンの数々。ラストの名演説の場面では、爽快さと感動を味わう。一番はタンゴのシーン。ホールをいっぱいに使った、見事なダンス。美しい音楽とともに、生涯忘れられない名シーン。

森松 千恵

① ココ・アヴァン・シヤネル アンヌ・フォンテーヌ 2009 仏
② コーヒー&シガレッツ

ジム・ジャームッシュ 2003 米・伊・日

③ スモーク ウェイン・ワン 1995 米・独・日

① どんな屈辱的な境遇におかれても屈しない強さ。奇抜で息苦しくても締付け、肌を露出するスタイルが当時流行していた中で、目的・着やすさ・シンプルさ、独自の感覚を貫いた彼女の才能と強さ！運？を、とても尊敬しています。

② ひたすらコーヒーとタバコしか小道具は無い短編集（笑）何って事のない日常会話についつい引込まれてしまう。コーヒーの楽しみ方も人それぞれ。煙草の良さはわかりませんが、本当にベストマッチなんじゃないかな！

③ 登場人物は皆、ごく普通の人物。でもそれぞれが相手を想いやる気持ちを少しずつ持っているところがホッとする。

吉村英夫

- ① 天井桟敷の人々 マルセル・カルネ 1945 仏
 - ② ローマの休日 ウィリアム・ワイラー 1954 米
 - ③ ショーシャンクの空に フランク・ダラボン 1994 米
- B・ワイルダーが「芸術映画は作らない。映画を撮るだけだ」といい、娯楽映画こそとの心情を語っている。「産業」だから圧倒的多数が相手である。そこから『サンセット大通り』『アパートの鍵貸します』等の珠玉が生まれた。私の規準もそこにある。生涯、映画を見続けた者に3作品とは拷問に近い要求だが、思いつくまま時代順に挙げる。①は沈黙は雄弁を超えたとする反ファシズム映画の金字塔。あえて『生きるべきか死ぬべきか』(E・ルビッチ)を省く。②は愛と友情が人間の最高の価値だと、ハリウッドの冬の時代を見すえつつ究極の名品に仕上げている。ワイラーでは『偽りの花園』が奥行き深い傑作だが、わくわくさせる映画的兴趣に欠ける。③は脱獄もので、自由への欲求が人間の間人たるゆえんで、与えられた自由が本物ではないのを痛快に教えてくれる。脱獄物『大いなる幻影』を忘れていた。あつ、もう一つ。チャップリンを挙げられなかった。『街の灯』かな。

和田正則

- ① 冒険者たち ロベール・アンリコ 1967 仏
- ② アメリカン・グラフィティ ジョージ・ルーカス 1973 米
- ③ ニュー・シネマ・パラダイス ジョゼッペ・トルナトーレ 1989 伊・仏

映画というものはある意味人生の応援歌だと思っている。当然、自分の人生を通して画面を見るし、評価も下すから、自分のこれからの人生にエールを送ってくれるような映画が観たくなる。気分が落ち込んで映画館に入っても出るときには口笛を吹けるのを期待するものだ。そういう意味で選んだのがこの3作品である。

この3本には人生の大部分が詰まっている。すなわち、③の初老になった映画監督が子供の頃を思い出すところから、成長して旅立っていくシーンが、②の旅立ちを翌日に控えた若者たち、とりわけジョージ・ルーカスを彷彿させる主人公カートにかぶさっていく。そして、旅立った彼らは挫折しながらも夢を追いかけた①でもあったのだ。

また、この3作は年代を遡っていく公開年度とフランス、アメリカ、イタリア映画という時空バランスがまたおもしろいのである。

中村藤生

① 激突 スティーブン・スピルバーグ 1973 米

② 真夜中のカウボーイ ジョン・シュレンジンジャー 1969 米

③ 恐怖分子 エドワード・ヤン 1986 台・香

2作はタイムリーに観た映画になった。1970年代、時代の中でわたしが最も揺れていた時に出会った映画。一つは①、あと一つは②。どちらも出会い頭に引き込まれた映画だった。アメリカンニューシネマが勃興していたことが後でわかった。当時その渦の中に翻弄されていたのだ。そして今、③につかまってしまった。①最後まで顔の見えないトレレーの運転手に追いつめられる無関係な中年の男。全く予知なく偶然に観た映画であったので、尚更に引きずり込まれる恐怖を強く感じた。②若き人生への欲望と哀歎を大都会ニューヨークの場末のリコとジョーに観た。ラスト、マイアミで殻を脱ぎ捨てるジョーとショップの若い女店員の瑞々しい笑顔が今も印象に残っている。③『激突』と全く異なる恐怖。怖さを見せずに想像させるところ、鋭さと空気が振動して伝わってくる。映画の天才だ。『ヤンヤン 夏の想い出』2000年が遺作となったことが悲しい。享年59才

林 久登

① 善き人のためのソナタ

フロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク 2007 独

② ラスト、コーシヨン アン・リー 2007 米・中・台・香

③ トウルルー・グリット コーエン兄弟 2011 米

①は東西ドイツの壁が崩壊する前(1984年)の東ドイツ。共産国家を維持するため、シュタイダー(国家保安省)により行われていた盗聴、密告の実態が生々しく描かれている。②は第二次世界大戦時、日本の統治下にあった中国。その傀儡政権の首謀者を、暗殺するために送り出された女スパイの物語。過激な濡れ場シーンでも話題になった。①も②もラストは女が衝撃的な最期を遂げる。①は男を裏切った女。②は愛のため、犠牲になる女。いずれも理不尽な国策に翻弄される人間を見事に描いてみせる。③はコーエン兄弟の娯楽作品。父を殺されたオトコマエの少女が殺し屋を雇い犯人を追うロードムービー。親子ほどある年齢差のヤンキー気質の無骨な男と今風のドライな少女のぶつかり合いが楽しい。毒蛇にかまれた少女を助けるため、昼夜をかけて荒野を疾走する人馬のロングショットが素晴らしい。久しぶりに西部劇の醍醐味を堪能させてもらった作品。

堀川 慶治

- ① ハードデイズナイト リチャード・レスター 1964 英・伊
- ② 荒野の7人・真昼の決闘 ジョン・マッコーワン 1972 米
- ③ イージー・ライダー デニス・ホッパー 1969 米

千代崎中2年の時、ブラスバンド部の仲間と四日市で①を観た。ド迫力の音響と大画面、その迫力に圧倒され、2回観た。(当時は入れ替えなし) ②は大学4年の時、初めて出来た彼女と、最初で最後の先行ロードショーを渋谷で観た。あまりにも面白く、『七人の侍』をリメイクしたと知り、その後名画座でシリーズも全て観た。この作品にオマージュが込められていることが、理解できた。あと1本。エーイツと思いついて③にした。これは大学2年の時、サークル“美研”の仲間たちと観た。アメリカンニューシネマの雄と言える映画であると確信した。貧乏学生だったので、当時3番館と名画座の3本立(学割ビラ下)ばかり一人で観ていたのに、選んだのは全て封切。話題作を奮発して観たことと、一緒に観た友たちと何度も感想を語り合ったからかもしれない。あと、惜しくも選に漏れたのは『バックトゥザフューチャー』『猿の惑星』各シリーズ。あつ、これ全て妻と観た。

森 次男

- ① ショーシャンクの空に フランク・ダラボン 1954 米
- ② ニューシネマパラダイス ジュゼッペ・トルナトーレ 1989 伊
- ③ ジョーズ スタイーブン・スピルバーグ 1975 米

映画『大脱走』(1963)を観てから脱獄モノ映画が好きになった。私の中のベスト①は、冤罪によって投獄された有能な銀行員が、20年の歳月をかけて脱獄に成功するまでの物語である。過剰な程の暴力や、上がひた隠す不正、また、命を落としてしまう受刑者も居る中で、最後まで希望を失わずに脱獄を成功させる主人公に感情移入させられた映画だ。映画を通じて、どんな不幸な出来事が訪れても、「希望を捨てない」というポジティブなメッセージが感じとれた。②は5歳から映画に魅了された自分とトトがダブリ、どのシーンも泣けるが、ひとつひとつのシーンがエンディングに集約され、映画愛に満ちている。エンリオ・モリコーネの軽快なメインターマも印象的である。③は社会人になって、初めて衝撃を受けた映画である。スリラー・ホラー・パニックの3ジャンルが一度に楽しめる最高の娯楽映画だ。